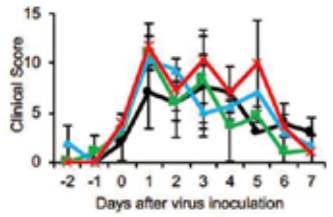
病理学講座：疾患制御病態学部門

テーマ：カニクイザルを用いる 新規抗ウイルス薬の有効性検証

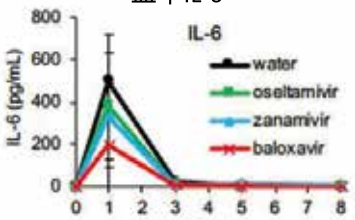
■ 背景

病理学講座：疾患制御病態学部門ではこれまでインフルエンザやCOVID-19など呼吸器感染症にフォーカスした研究を進め、特にカニクイザルを用いる抗ウイルス作用について数多くの成果を報告してきた。抗ウイルス作用としてはウイルス量以外に炎症性サイトカイン、病理組織解析など様々な視点から有効性を評価することが可能である。H7N9型インフルエンザウイルスに対する抗ウイルス薬の効果を比較した事例を以下に示す。

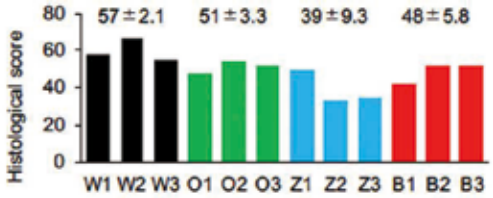
臨床スコア



血中IL-6



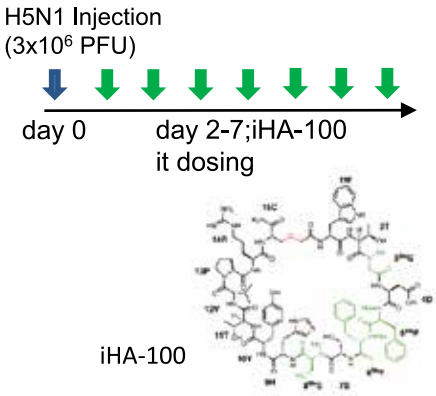
肺炎組織の定量解析

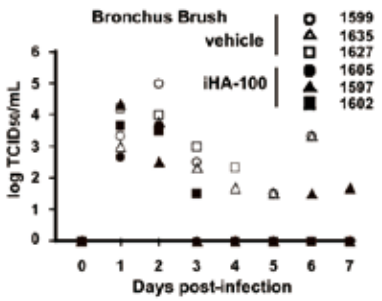


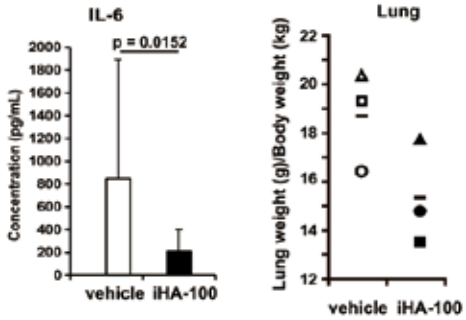
Antimicrobial Agents and Chemotherapy, 2021, 65 e01825-20

■ 共同研究の事例

新規作用機序の抗インフルエンザ薬としてHemagglutinin阻害剤を東京大学、北海道大学などと共同研究してきた。その有効性をカニクイザルを用いて検証した結果について以下に示す。







NATURE COMMUNICATIONS (2021) 12:2654

■ 製薬会社との共同研究経験

抗ウイルス作用は信頼性保証試験レベルで対応可能（特にインフルエンザや新型コロナウイルスなど）。また、抗ウイルス薬開発における非臨床/臨床試験パッケージについてコンサルテーションも可能。

P3レベルの実験設備を持ち、国立感染症研究所から様々なウイルス株が入手出来る他、附属病院から臨床分離株を利用することも可能である。

■ 病理学講座疾患制御病態学部門のホームページ
http://www.shiga-med.ac.jp/~hqpatho2/